

●● 観察者と保育者の対話 (10)

……… 観察者から保育者へ

これは飛べられないね！

うふふ。そうね。飛べないのよね。

見たことあるかしらね。あひるさん。

じゃ、これは…。

あ、飛行機。飛べられる！

そうね、ブーンってお空を飛ぶわね。

かえるさん！ かえる、かえる。

跳べられる。

びよんって。

でも飛べられないよ。

うん。

お空を跳ばないけど、

草をびよんって跳ぶのよね。

もうすぐお帰り。学期末の一日。

エプロンシアターを演じる先生。

応答する子どもたち。

ありそつでなきそつな言いまわしに

照れつつ、可愛く思う気持ちを隠せず、

共に楽しむ母親たち。

言葉が交わされる。気持ち、交わされる。

この日訪れたチューリップ組は、もみじ幼稚園内に設けられた未就園児親子クラスである。あらかじめ登録した親子が決められた曜日に週一回のペースで通ってくる。現在、火・水・木・金に開設されている。

連日の雨は上がったものの、どんよりと曇ったその日、園舎屋上で予定されていた水遊びは、あえなくキャンセルとなる。部屋の隅の、ペットボトルのシャワーなど手作りの水遊びグッズだけが、出番が巡って

こなかったことに、多少しよげているふうであったが、中村先生はしかし、そんなことにはお構いなしに、同僚の渡部先生と茶話会の用意をし、マラカス作りの材料をそろえ、ピアノの上には紙芝居舞台とエプロンシアターを置き、部屋の上つらえに余念がなかった。在園児の弟妹が多いというこの日のクラスに、在園の子を送ったその足で、親子が次々やって来る。途中入園で、この日が二回目というAちゃん。中村先生はすーっとかがんでAちゃんの斜め横にひざをつき、「Aちゃんおはよ。よく来たね」と、軽く肩を抱きながら仰々しくない調子で言う。Aは、目を覆うようにしていた右腕を顔からゆつくりはずす。

それを見届けるか見届けないかのうちに中村先生の背後でほかの子が「ねえ、これ食べてるの?」と、水場近くに置いてある小さな飼育ケースを指さして言う。「うん、食べてるのよ。これ」と中村先生がケースを手にするや、別の場所で「きゃー、コーヒーカーツブ忘れちゃった」との母親の声。中村先生は片手に

ケース、片手は子どもと手をつなぎ、腰の辺りに二人、三人子どもをくつつけるようにしたまま移動して、「そしたらー」と、棚からプラスチックのカップを出し、「子ども用だけどこれでどう?」と、かの母親に渡し、何事もなかったかのように飼育ケースを床に置いて、子どもたち四人と中をのぞき込んでいる。一人の子どもが「ほんとだ、赤いうんちしてるねえ」と言うのに応じて、「そうでしょう? ほら。見て。やっぱりそうだったわね」。

ケースの中には、小さなカタツムリと、餌のニンジン。どうやら、チューリップ組でそれにつつまる本を読んでもらったり、話を聞いたりしたことが、二歳、三歳の子どもと先生とに、共通に一週間かそれ以上の時を空けてつながっているらしかった。

一畳のスペースに居場所を確保し観察をする私の所に、小さな弟たちが二人、どうも遊べそうだと、瞳を輝かせながらはってくる。ありがたいかな、彼らに相手をされながら、クラスの様子を見せていただく。

二、三か所で何やら楽しげにのどかに話をしていた母親たちの輪が、何とはなしに中村先生を中心に緩やかなまとまりをなし、何か共通のことを話題にしているふうであった。「あらそう。どうしましょうねえ」と、それまでの流れから異彩を放つわけでもなく、ちよつと困った口調で中村先生が言う。予定していた誕生会で、祝われる子どもが一人、欠席するとの情報を得たらしい。何と和やかに、困っていることよ、と私は半ばあきれつつ感心した。

そんな中、子どもの一人が黙々と取り組んでいたバズルを仕上げ、満足そうに「できた!」と言う。待っていましたとばかりに、「じゃ、(次は)マラカスだ!」と言ったのは、保育スタッフではなく一人の母親。「私もね、(マラカス作りを)そろそろやれたらいいなあ、なんて、ちよつと気にはしていたのよ」と声を立てて笑いながら中村先生が「言い訳」をし、マラカス作りの材料をそそくさとテーブルに運び始める。

続いて茶話会。かの小さな弟たちは、いすに腰を落

ち着けた母親の姿を確認すると、あるいははい、あるいはたどたどしく歩いて母の元へ。そして、多少の時間差はありながら、母はそれぞれに何でもないことのように上衣をめくり上げ、授乳を始める。赤ん坊に乳をやるという当たり前なはずの行為を、社会にやや開かれた場で見ることが久しく無かったので、それが当たり前前そのまま展開されていることを感慨をもって見るともなしに味わい見る。

マラカス作り、誕生会、茶話会、外遊び代わりの別室での平均台やマットの遊び……。設定され、また実行されたことは実に多々ありながら、なぜ、かくも緩やかに穏やかに、事柄も人も際立たずに流れていくのか。保育者の何気ないたたずまいが、どうやらそれを可能にしていることに、私は心地よく驚き、共感を覚えながら、チューリップ組を後にした。



…… 保育者から観察者へ

この日は、一学期最後の保育日だった。屋上での水遊びは、ぜひやりたかったのだが、あいにくの曇天。数日続いた悪天候に水も冷たくなっていたので、楽しみにしていた水遊びは中止にした。それでも、夏休み前最後の回ということで、何かと盛りだくさんの予定が組まれていた。しかし、そんなことはおくびにも出さず、いつものペースで一日が始まった。

カタツムリは梅雨の初めごろから教室の片隅にいたのだが、ちょうど前回、カタツムリの飼育に関する幼児向けの本をみんなで見たばかりだった。ニンジンを食べると本当にニンジン色のうんちが出るんだと確認し合って、それから手のひらにのせたり、友達にそれを譲ったりし合う。ちよつとひんやりして、ぬるぬる…、にゆう〜と出てきた角にちよんと触ってみて、慌てて手を引つ込める。カタツムリも慌てて角を

引つ込める。小さな生き物との、どきどきわくわくの触れ合いが、子どもたちの心を育ててくれる。

それぞれが十分満足したところで、カタツムリを飼育箱に返し、せっけんで泡をぶくぶく立てて手を洗う。みんなで輪になって同じものを見つめる、みんなで肩を並べて同じことをする。知らぬ間に関係が深まる、仲間になる、友達になっていく。

その後ろで、お母さんたちは明るい声であいさつを交わしながら、身支度をほどこき、荷物をロッカーに入れ、きょうの茶話会（節目節目でお母さんにもお茶を出し、ゆつくりお話を聞く機会を設けている）のためのカップを並べたりしていた。

さて、そろそろきょうの製作、《マラカス》作りを始めようかと思つたとき、テーブルコーナーでパズルをやっていたお友達の声に誘われて、珍しくSが仲間に加わる。入級当初、なかなかみんなと一緒にできなかったり、座っていられなかつたりしたのだが（本当

はそんなことはまったく問題ではないが、お母さんはちょっと気にしてた)、自分からいすに座ってパズルをする姿にお母さんほうれしげにしていた。あゝ、マラカスを作る時間が…と思いつつ、でも、この場面を切り上げるに忍びなく、子どもたちのパズルが完成するたびに共に喜び拍手を送る。と、Sの「できた!」の声に、Sのお母さんが「じゃ、マラカスだ!」。あら、お母さんたら、ちゃんと予定表を見ていて、わが子がパズルをする姿に喜びつつも、マラカス作りの時間のことを気にしてくださったのね。かえって気を使わせてしまったわね、と思った。

このチューリップ組を担当するようになってから、今年で四年目になる。最初は、子どもたちと一緒に遊ぶのが楽しくて、子どもたちのほうばかり見ていた。しかし最近では、子どもの保育はもちろんだが、お母さんを応援する場でもあるのだなと、つくづく思っている。週に一度の出会いの場ではあるけれど、回を

重ねていくうちに、何気ないやりとりがごく自然に交わされて、子どもたちにも保育者にもそしてお母さんにも、共にいて心地よい空間をつくっていったら素敵だなと思う。

ある研究会で、同僚の岸澤先生は、「お母さんにとっては実家にいるような」と表現されたが、まさにそれが理想的な姿であろう。しばし家事からも解放され、ほっと一息つける、ちょっと困っていることを愚痴ってみる、うちの子だけでなく隣の子どものお友達も、みんなわが子のように褒めたりしかったり遊んだり…。そんな中で、それまで家庭で大切に守られ慈しまれてきた子どもたちは、お母さんのひざの上から一歩、二歩と離れていき、しだいに友達との世界をつくっていく。そんな場所に、チューリップ組がなっていけたらと思っている。

菊地知子（お茶の水女子大学）

中村恵子（東京都豊島区 もみじ幼稚園）